■エッセイ■

別府大学の思い出

■篠塚　二三男■

学科創設三十五周年おめでとうございます。

わたしは一九八七（昭和六十二）年四月から一九九七（平成九）年三月まで、ちょうど十年間別府大学にお世話になりました。まだ美学美術史学科という名称の時期で、ほんとうに古き良き時代でした。

恥ずかしながら別府大学に赴任するまで九州には一度も足を運んだことがなかったのですが、大分空港に降り立ち、別府国際観光港までバスに乗って眺めた情景は今でも記憶に残っています。ヤシの並木の続く国道を通ったときは、南の国に来たのだと言う実感がわきました。この日に仲嶺先生の案内で別府の町を回っていたとき、偶然檜垣先生とお会いし喫茶店で過ごしたこともよく覚えています。

参号館で岩尾先生の奥様のお弁当をおいしくいただき、多くの方々と談笑できたのがなつかしいです。単身赴任のわたしは近くの甘味茶屋にもよく通いました。だんご汁のおいしさは忘れられません。

仲嶺先生が毎年新学期に美学美術史学科の新入生を集めて十人ほどのグループ別に全員の写真をとり、それを名簿にしたものが、いまも手元にあります（後半五年分ですが）。これを見ると学生たちの性格までもが浮かんできて、家族的雰囲気であった学科のことがまことになつかしいです。

今と違って、どこの大学もすこぶるのんびりとしていました。ここには書けないようなこともごく普通に許されていた時代でした。それぞれの先生や職員、学生についてたくさんの思い出がありますが、ここには書ききれないし、書くべきでないこともあるので、今回は遠慮しておきます。

しかし毎日のように通った近くの温泉のことは書かざるをえません。鉄輪温泉と柴石温泉にはほんとうによく通いました。明礬温泉の手前の坂道をのぼり、墓地の奥にある露天の秘湯では扇山を仰ぎながら時間を忘れたものです。湯布院や湯平温泉は思い出すだけで何か心地よいです。

一九九〇年は日本のバブルがはじけた年ですが、この年の夏の三ヶ月間の留学を許され、フィレンツェなどに滞在しました。この時のレオナルドの素描の研究は、いまでも自分の研究のベースとなっています。学科主催のヨーロッパ旅行もよい思い出です。

わがままな行動の多かった小生ですが、歓送会のときには西村理事長をはじめ多くの方々に出席していただき、感謝しております。

別府大学での十年間は私の人生において一番幸せな時期

だったかもしれません。東京に移ってからの二、三年は電車に乗っていても別府のことが思い出され虚ろな状態になることがしばしばでした。

いろいろお世話になった名取先生が逝去され、今いる大学でお世話になった福部先生もその翌年亡くなられた。自分も定年が遠くないことを実感するこの頃です。

昨今の大学を取り巻く状況は厳しくなる一方ですが、私が別府にいた時期の大学は本当に天国のような時代で、その頃の情景が走馬灯のように頭を去来します。

（跡見学園女子大学教授）